

仮説の設定ができる子どもを育成する 小学校社会科の授業づくり

緑丘小学校 教諭 井上 和也

キーワード：社会、理解、授業づくり、仮説、根拠、検証、情報、資料

1 はじめに

社会科は、「社会認識形成をとおして市民的資質を育成する」ことを目標としている。社会認識とは、社会のしくみが分かることである。授業者は、子どもが社会のしくみを分かるようになるために、子どもの既有知識と矛盾する社会事象に出会わせ、その社会事象が「なぜ」起こるのかを問う必要がある。子どもは「なぜ」を解決するために、仮説を設定し、仮説を検証する方法を考える。設定した仮説が正しいかどうかを検証することで、「なぜ」が解決し、社会のしくみを理解することができる。このことが社会科の授業に探究を組み込む理由である。しかし、子どもに「なぜ」を解決するための仮説を設定させることは、とても難しい。

そこで、「なぜ」に対して、子どもが設定した仮説の根拠を明らかにして、その妥当性を話し合うという場面を組み込んだ授業を提案する。仮説の根拠の妥当性を話し合うことで、「なぜ」の解決に有効な仮説の設定ができる子どもを育成することをねらいとしている。

2 5年生「さまざまな土地の暮らし」の授業実践から

(1) 「なぜ疑問」の発見と仮説の設定

子どもが社会のしくみを分かるようになるためには、子どもの既有知識と矛盾する社会事象に出会わせ、子どもに「なぜ」という疑問を起こさせる必要がある。そして、その社会事象(結果)が起こる原因についての推理を行わせる。

推理を行うためには、前提となる情報の収集が必要になる。社会科の授業の場合、前提となる情報は、提示された資料から読み取ることができる情報と既習知識・既有知識から選択され、活用される情報となる。

子どもが予想を設定するとき、必ず前提となる情報が存在しているということになる。しかし、その前提に気付かない子どももいる。そのため、ペアや小グループをつくり、「なぜそのような予想をしたの。」と質問し合うことで、前提となる情報が何であったかを明らかにする場面を設定する。この活動を組み込むことによって、今まで、思いつきだと考えられていた予想にも、子どもなりの根拠があったということが分かるのである。また、子ども自身も前提となる情報(根拠)を尋ねられることが分かっているため、予想を設定する場面から前提となる情報を意識するようになってくる。

次に、複数ある予想の根拠の中から、最も正しいと考えられるもの一つを選択し、仮説を設定させる。設定した仮説を発表させる際は、「(結果が起こるのは、)〇〇(仮説)だからだと考えました。そう考えた理由は、△△(根拠)だからです。」という形で行わせる。発表された仮説を板書することで、仮説が設定された根拠をクラス全体で共通理解することができるようになる。

最後に、クラス全体で共通理解した仮説の根拠の妥当性について、話し合いを行う。そして、話し合いの結果を参考にして、クラスとして検証すべき仮説を選択するのである。

この仮説設定までの学習過程を図示すると、次ページ図1のようになる。

(2) 仮説の検証のための資料の選択

前段階の取り組みを行うことで、子どもは、根拠をもって仮説を設定することができるようになる。次は、その仮説が正しいかどうかを検証する力をつける必要がある。社会科では、資料を活用することで仮説を検証する。そのため、子どもには、仮説を検証するための資料の選

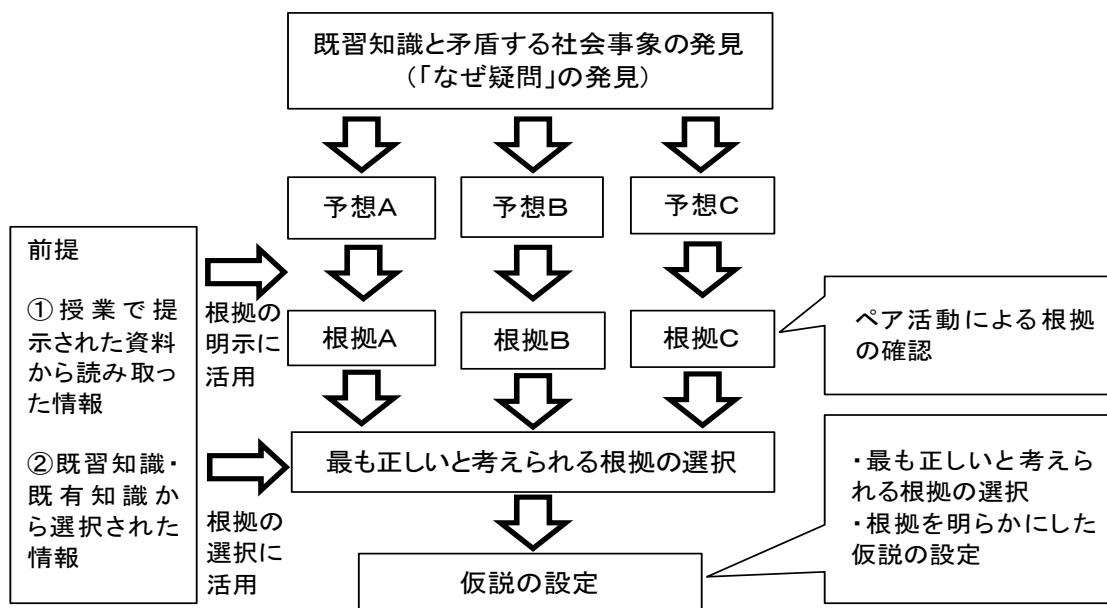


図1 仮説設定までの学習過程

択を行わせる。仮説の検証は、設定した仮説の根拠が正しいかどうかを確認することで行うことができる。授業者は、「仮説の根拠が正しいというためには、どんな情報が必要か。」を質問し、子どもに考えさせればよい。

例えば、「岐阜県海津市で水屋という建物が高い石垣の上に建っているのは、洪水が起こったときに避難するためではないか。」という仮説を設定し、その根拠が「三つの大きな川に囲まれた低い土地で、洪水が起こりやすい。」だったとする。この場合、「根拠になっている『洪水が起こりやすい』を確かめるための資料があればよい。」ということになり、「洪水の発生回数が分かる資料」が選択されるということになる。

仮説の設定場面で、仮説の根拠を明らかにすることは、仮説を検証するための資料選択を行いやすくすることにつながる。

(3) 選択した資料をもとにした検証

この段階では、選択した資料によって、仮説の検証が行われる。子どもは、根拠をもって設定した仮説が正しいかどうかを確認することになる。仮説が検証されることによって、本時で学習した「社会のしくみ」の原因が明らかになり、「社会のしくみが分かる」ようになる。授業者には、設定した仮説が正しいかどうかを確認できる資料を提示することが求められる。子どもが選択した資料のみで仮説を検証することが難しい場合には、追加の資料として、授業者が準備した新たな資料を提示する必要がある。

3. おわりに

子どもの既有知識と矛盾する事象に出会わせ、その事象が「なぜ」起こるのかを問い、仮説を設定し、仮説を検証することで「なぜ」を解決するという方法は、他の教科だけでなく、子どもの日常に発生する問題の解決にも活用されることが考えられる。

社会科は、子どもに身近な社会事象を学習課題として取りあげることができるため、子どもの問題意識に即した学習を行うことが可能となる。身近な社会事象から発見した「なぜ」を解決することをとおして、子どもの問題解決能力を高めることができる。

〈引用・参考文献〉

- (1) 米田豊「『習得・活用・探究』の社会科授業づくりと評価問題」米田豊編著『「習得・活用・探究」の社会科授業&評価問題プラン』明治図書 2011 pp.7-21
- (2) 井上和也「『写真資料』の活用とアクティブ・ラーニング」米田豊編著『活動あって学びあり！小学校社会科アクティブ・ラーニング21の授業プラン』明治図書 2016 pp.26-33